令和7年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業

実施計画書（継続団体用）

活動団体の本事業での活動テーマ
『クロスオーバー』

活動団体の活動地域：新潟
活動団体名　　：NIIGATA MUSIC LABORATORY
中間支援主体名　　：SHE

参加団体の基本情報

（１）活動団体の基本情報

団体名	NIIGATA MUSIC LABORATORY
活動地域	新潟

専門性・強み
#スモールスタート #良質なカオス #共感のカルチャー #場づくり #ハブ #クリエイティブ #フェス

団体概要
ミュージシャンやアーティストの活動支援をベースに、様々な事業者との連携を経て、公共空間を活用した有効な場づくりを行ってきた。 「新潟を音楽の街に」をテーマに、大小様々な地域イベントをサポートしつつ、特に公共空間の活用を通じて、地域と様々なカルチャーと連携させ培ってきた「共感のカルチャー」が強み。地域資源(モノ・ヒト・コト)を繋ぎ合わせて一つにし、音楽や芸術をブースターとし、オンラインとオフラインの双方の強みを活かしたクリエイター共存型のまちづくりを目指している。

（２）中間支援主体の基本情報

団体名	社会事業家団体SHE
活動地域	新潟

専門性・強み
#個の多様性 #柔軟性 #コーディネート #ファシリテーション #マネジメント #スタートアップ

団体概要
「Share Human Energy」をコンセプトに、個人がもつ可能性や行動を応援し伴走することで、この地に生きる人々の幸せと希望を、共に育んでいく団体。 社会事業化とは、市民が地域社会の環境・経済・社会に係る課題や発展にふれる機会を創出し、市民の意識や行動の移り変わりを支援し、協同や助け合いによる持続可能な地域社会の形成を促すことを指し、その現象の創造を目的としている。 地域の団体の伴走支援やイベント企画運営などに取り組んできている。

活動団体と地域の紹介

NIIGATA MUSIC LABORATORY

「新潟を音楽の街に！」をテーマにミュージシャンやクリエイターの活動支援を行っており、１２年間深く関わり続けている「いわむロックFESTIVAL」は街の豊かさや憩いを表現する活動環境の整備にも寄与している。地産地消をコンセプトとした地域循環型フェスいわむロックFESTIVALへの関わりを経て、現在は数多くの公共施設、行政主体のまちづくり事業や市民活動サポートを積極的に行っている。環境省事業としては3年目を迎え「NEW HOPE」プロジェクトとして、地域循環共生圏プラットフォームづくり「coffee house」を起点に、市民が地域で実践するアイディアを膨らまし、共に「スモールスタート」を実践するまでに至っている。

地域の紹介

課題解決できるプレイヤーが点在しているが出会いの場がなく、常に人手が足りず、ソフトの場(活動)が生まれにくい。また、高齢者のプレイヤーが多くいるが、柔軟な対話が難しく若いプレイヤーが寄りつかず、良い取り組みや事業が消滅している。また、創業率も低い。
新潟は、大学や専門学校が多くあり若者の人口は多い。そして、地域づくりに興味のある学生が点在している。また、自然が多くあり自然体験ができる場所が多くあるが、活用方法が知られていないのか、自然に触れる機会が少ない人が多い。

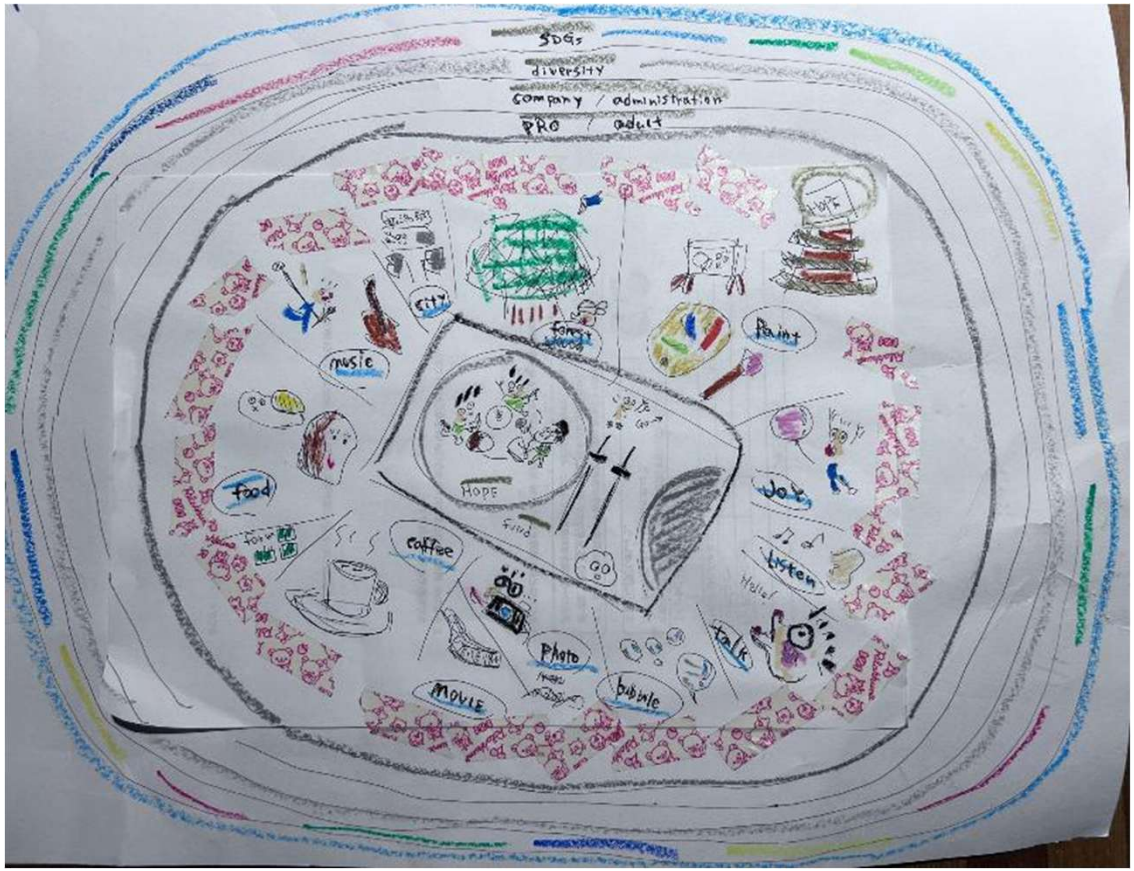
NEW HOPE「coffee house」プラットフォームと実践の場づくり

新潟市西蒲区共催　岩室温泉いわむロックFESTIVAL　GREEN STAGE

活動団体の目指す地域の姿

■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

スモールスタート→ミックスカルチャーと共存
※図はミックスカルチャーのイメージ



新幹線を降りて、駅を出た。
道を歩いていたらどこかからギターや歌声が聞こえた。
この街のアーティストかな？

小さな公園を覗いたらフリーコーヒーを配ってた。
このまちの親子が焙煎したコーヒーらしい。
キッチンカーもいた。
このまちで育てられた野菜やお米を使ったフードだ。

ちょっとベンチに座って一休み。

木のかげでお話している人がいる。
絵を書いてる人がいる。
写真をとってる人がいる。
動画を撮影してる人がいる。
歌っている人がいる。演奏している人がいる。
子どもたちの笑い声が響いている。

あの人、2階の窓から楽しそうに眺めている。
いい顔してるな。
ここにいる人もみんないい顔してるな。
あ、そういえば、ここに来る途中もみんないい顔してたな。

活動団体の目指す地域の姿

■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

「新潟の街を素敵な街にしたい。思いやり溢れる支え合いの街に。沢山の個性を認め助け合う社会に」これが、活動団体のテーマである。その為にも、音楽をはじめとした多様な文化が街に溢れ、様々な価値観が共存しあう環境が新潟に育まれることを目指している。そして、このミックスカルチャーな環境こそが、地域循環共生圏を経て地域に寛容さと柔軟さを獲得する大切な要素となる。

■地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

NIIGATA MUSIC LABORATORYがリアルでの「coffee house」とオンラインでの「LINE」の運営を担い、SHEがその運営支援を行う。このプラットフォームには新潟市役所やプロジェクト参加者が積極的に協力してくれており、事業の種を生み出す為のコミュニケーションを常に図っていく。プラットフォームにおいて声を出しやすい環境や関係性を築くために個別相談にのったり、心理的安全性を高める為のコミュニケーションを継続的に図っていく。

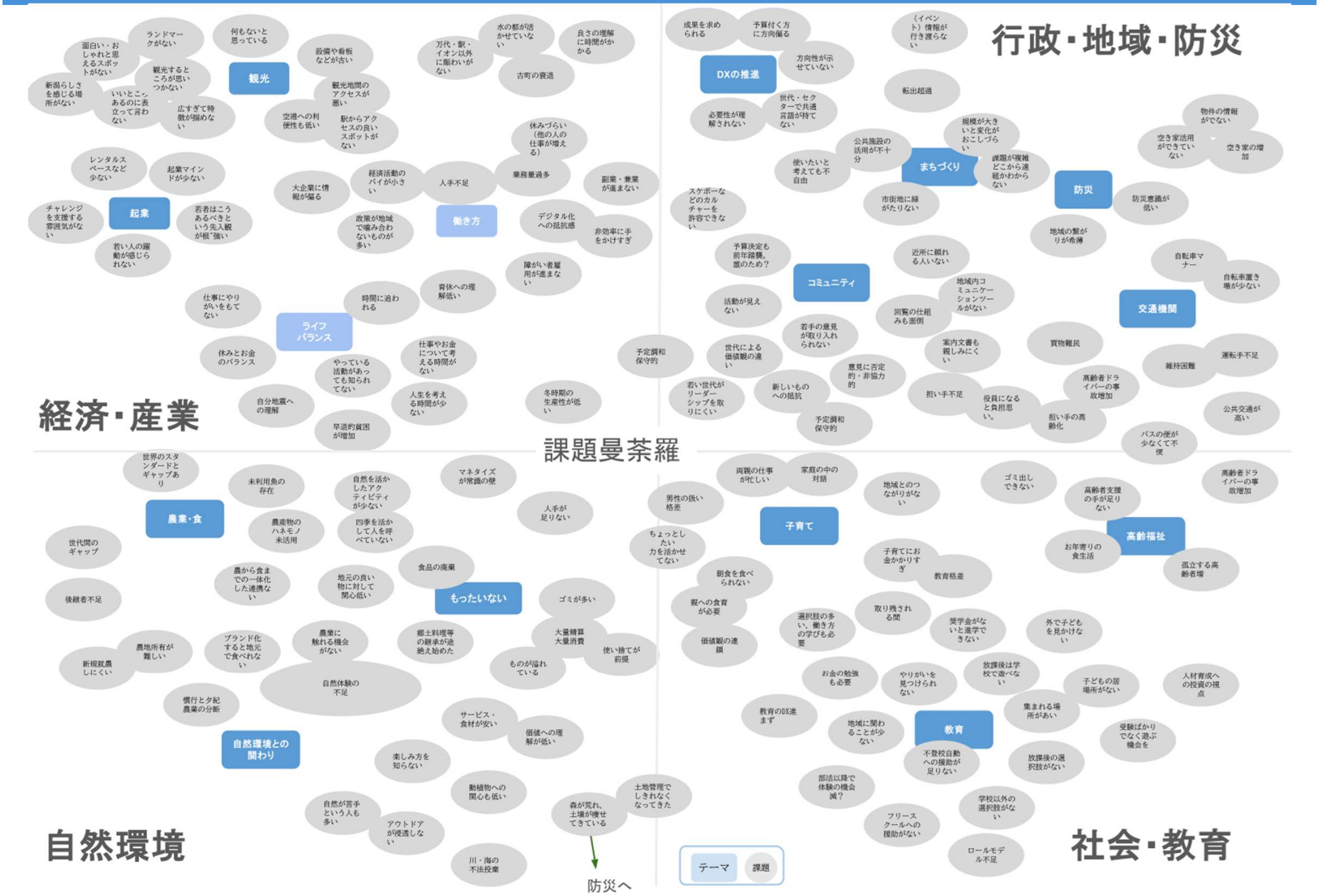
■ローカルSDGs事業として取り組む内容

（1）COFFEE HOUSE
地域課題と資源の掘り起こしをおこない、その声を地域版マンダラにまとめ、地域課題とプレイヤーがやれることを結び付けていく。運営するcafe feelが人の交流起点になり、lagoon.20が地域活動への入り口としての機能を果たす。
（2）LINEのオープンチャット運営
情報交換と交流の場として、LINEのオープンチャットを運営する。ここでのやりとりを入り口に、事業のタネの発掘や人材のマッチングを図っていく。
（3）「事業のタネ」の支援
事業のタネが形になる為に、参加者の活動を支援する。地域事業者や地域ステークホルダー、行政窓口の紹介、地域課題に関する相談、など。

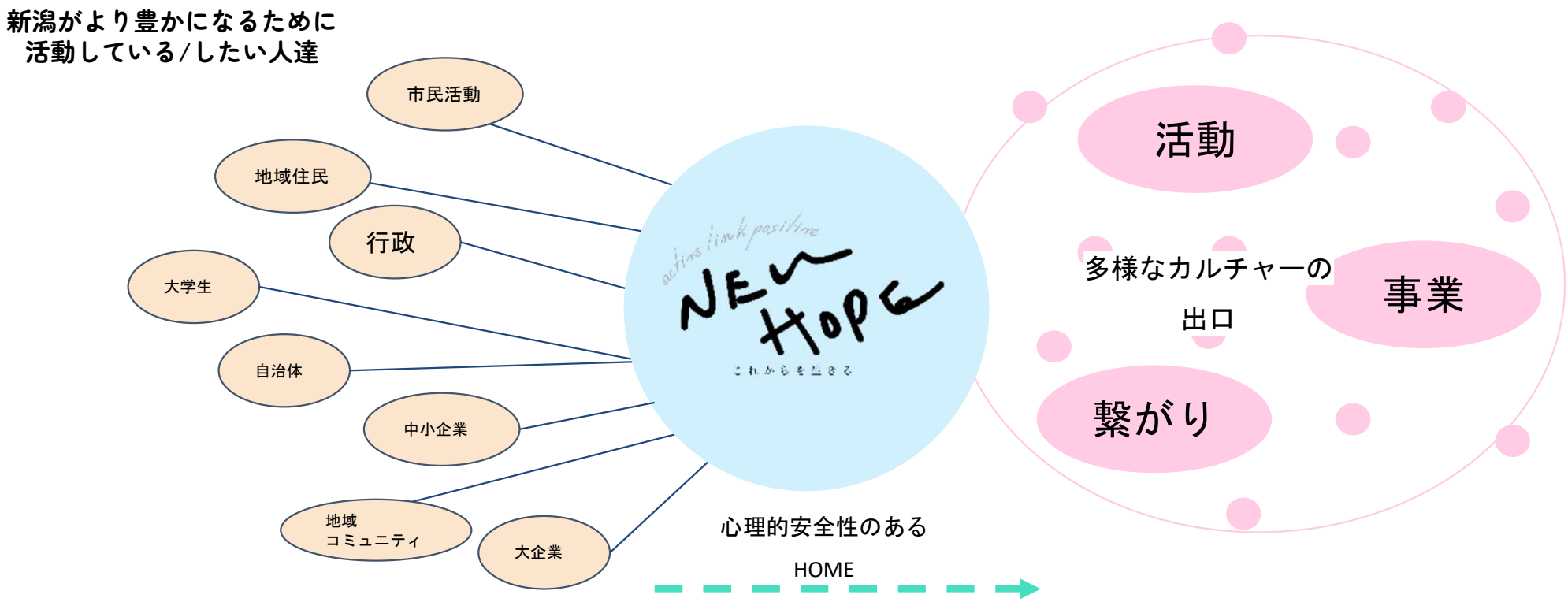
■地域の現状と課題

開港5 港の一つとして栄えた新潟市は、開港文化や農・漁・工業文化、これらに紐づく豊かな食文化が魅力となっている。ただ、人口減に加え、開業率が低いことから地域側のプレイヤー不足が課題としてあげられる。環境も資源も豊かな新潟だが、人材と資源のマッチングや人材同士のネットワーク形成が生まれる機会が少ないことも課題だと考えられる。

現時点のマンダラ


行政・地域・防災
経済・産業
課題曼荼羅
自然環境
社会・教育
観光
ランドマークがない
何もないと思っている
面白い・おしゃれと思えるスポットがない
観光するところが思いつかない
新潟らしさを感じる場所がない
いいとこ、あるのに表立って言わない
広すぎて特徴が掴めない
設備や看板などが古い
観光地間のアクセスが悪い
空港への利便性も低い
駅からアクセスの良いスポットがない
水の都が活かせていない
万代・駅・イオン以外に賑わいがない
良さの理解に時間がかかる
古町の衰退
起業
レンタルスペースなど少ない
起業マインドが少ない
チャレンジを支援する雰囲気がない
若者はこうあるべきという先入観が根"強い
若い人の躍動が感じられない
大企業に情報が偏る
働き方
経済活動のパイが小さい
人手不足
政策が地域で噛み合わないものが多い
休みづらい（他の人の仕事が増える）
業務量過多
副業・兼業が進まない
デジタル化への抵抗感
非効率に手をかけすぎ
障がい者雇用が進まない
ライフバランス
仕事にやりがいをもてない
時間に迫われる
育休への理解低い
休みとお金のバランス
やっている活動があっても知られてない
仕事やお金について考える時間がない
人生を考える時間が少ない
自分地震への理解
早退的貧困が増加
予定調和保守的
冬時期の生産性が低い
DXの推進
成果を求められる
予算付く方に方向偏る
方向性が示せていない
（イベント）情報が行き渡らない
転出超過
必要性が理解されない
世代・セクターで共通言語が持てない
まちづくり
規模が大きいと変化がおこしづらい
公共施設の活用が不十分
使いたいと考えても不自由
課題が複雑どこから手を出せばかわからない
市街地に緑がたりない
スケボーなどのカルチャーを許容できない
防災
物件の情報がでない
空き家活用ができていない
空き家の増加
防災意識が低い
地域の繋がりが希薄
コミュニティ
予算決定も前年踏襲。誰のため？
近所に頼れる人いない
活動が見えない
地域内コミュニケーションツールがない
回覧の仕組みも面倒
若手の意見が取り入れられない
世代による価値観の違い
意見に否定的・非協力的
新しいものへの抵抗
若い世代がリーダーシップを取りにくい
予定調和保守的
交通機関
自転車マナー
自転車置き場が少ない
案内文書も親しみにくい
買物難民
維持困難
運転手不足
担い手不足
役員になると負担思い。
高齢者ドライバーの事故増加
担い手の高齢化
公共交通が高い
バスの便が少なくて不便
農業・食
世界のスタンダードとギャップあり
未利用魚の存在
自然を活かしたアクティビティが少ない
マネタイズが常識の壁
人手が足りない
農産物のハネモノ未活用
四季を活かして人を呼べていない
世代間のギャップ
農から食までの一体化した連携ない
地元の良い物に対して関心低い
食品の廃棄
後継者不足
もったいない
ゴミが多い
農地所有が難しい
ブランド化すると地元で食べれない
農業に触れる機会がない
郷土料理等の継承が途絶え始めた
大量精算大量消費
使い捨てが前提
新規就農しにくい
ものが溢れている
自然体験の不足
慣行と夕紀農業の分断
サービス・食材が安い
価値への理解が低い
自然環境との関わり
楽しみ方を知らない
動植物への関心も低い
土地管理でしきれなくなってきた
自然が苦手という人も多い
アウトドアが浸透しない
森が荒れ、土壌が痩せてきている
川・海の不法投棄
防災へ
子育て
両親の仕事が忙しい
家庭の中の対話
地域とのつながりがない
男性の扱い格差
ちょっとしたい力を活かせてない
朝食を食べられない
親への食育が必要
価値観の違い
子育てにお金かかりすぎ
教育格差
取り残される間
選択肢の多い、働き方の学びも必要
奨学金がないと進学できない
外で子どもを見かけない
高齢福祉
ゴミ出しできない
高齢者支援の手が足りない
高齢者ドライバーの事故増加
お年寄りの食生活
孤立する高齢者増
教育
お金の勉強も必要
やりがいを見つけられない
放課後は学校で遊べない
子どもの居場所がない
人材育成への投資の視点
教育のDX進まず
地域に関わることが少ない
集まる場所があい
受験ばかりでなく遊ぶ機会を
不登校自動への援助が足りない
放課後の選択肢がない
部活以降で体験の機会減？
学校以外の選択肢がない
フリースクールへの援助がない
ロールモデル不足
テーマ
課題

“地域プラットフォーム”のイメージ



地域のことを想い活動している、もしくは活動したいと思っている「意志」のある人達が集い、異なる価値観にも触れながら視座を高めあい、地域の解像度をあげ、社会課題（マンダラ）を通じて深みのある活動や事業への発展が生まれるプラットフォーム

主なステークホルダー

新潟がより豊かになるために活動している個人・団体

地域：旬果甘味店ルコト・ゆめみるこども食堂・Smile Story・未来農業総研・JAT・赤沢保育園・PORT
株式会社And Three・＊riri＊felt＊・あぽろん音楽スタジオ 駅南店・Smile軽音部・210coffee・DJ UME
Sea Point Niigata・YORIMICHI・MOYORe:・EDOA・曽野木アトリエ・NICO・中島伸(東京都市大学)**学校**：大学生(新潟県立大学・敬和学園大学・新潟大学)・柳都中学校

ローカルSDGｓ事業の詳細

種から生まれた事業

事業名称１：事業名称：アップサイクルをベースにした共生圏内サーキュラーエコノミー実証事業	
あらすじ	
NEW HOPEプロジェクトをきっかけに繋がった事業者同士が、地域課題の発見を通じてスピーディーかつ連続的に連携し、新潟市西区に水揚げされる未利用水産物の活用から農業分野にまで進化した取り組み。NIIGATA MUSIC LABORATORYは伴走支援を手掛ける。	
ストーリー	
きっかけは、世界スポゴミ選手権2位のSmile Story。発足当時代表の綱本氏と元代表の高橋氏がコロナ禍の活動を子供達と共に始めたことがきっかけ。ただシンプルに海岸清掃を精力的に行なっていたところ、地域の事業者も協力し、新川漁港との縁に繋がった。未利用魚の問題に初めて触れて、Smile Storyはこれを活用した商品開発やこども食堂を開始。協働する形で本格的に「農業未来総研」「JAT」が参画。世界スポゴミ選手権の国内優勝→2023年世界2位へと繋がる。2024年に入り綱本氏が本格的に未利用魚商品の開発とアップサイクルに着手し株式会社バイオガールを創設。共創パートナーとして「MUSIC DROP」も参画し、経営しているカフェなどでの商品開発や利用を共に行うことになった。2023年後半あたりから、引き続き伴走支援をNIIGATA MUSIC LABORATORYが務めることとなる。各団体の代表がたまたま同い年ということもあり意気投合。社会背景や問題意識なども近く通じるものがあり関係性作りに時間はあまり必要なかった。奇跡のような出会いで、大手企業からのオファーなど立て続けに頂いており、今後の展開に希望を持ちながら取り組んでいる。	

事業の骨子		現時点で想定される 課題・ボトルネック
①ありたい未来	新潟では水産品を含む未利用品の活用が充分に行われており、アップサイクルによる取り組みと教育が充分に行き届いている状態。	ここまでは、ゼロイチは巧みに生み出されているが、PDCAサイクルをする現場が足りていない。MUSIC DROPが経営するカフェ数店舗にて共創し商品開発したものを実際に顧客に利用してもらいフィードバック。外貨を稼げる商品としてクオリティを上げる場づくりをしていきたい。それぞれがバイタリティ高く、気づけば新しい取り組みやオファーにまみれているため、これを精査し全体でビジョン共有をする。方針を定めるなどの機会作りが間に合っていない。
②課題	新潟では、暮らす上ではありがたいことだが物価が低く、企業が儲かりにくいバランスに落ち着いてしまっている。農業・漁業の距離が近く、ある程度不自由なく食材が手に入るため、食材に対する課題意識が持ちづらい。規格外品の物が余り処分されることについての課題意識も同様である。地域自体の価値観をアップサイクルにより高める必要がある。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	「もったいない」をアップサイクルでブランディング。県内の消費は暮らしやすさの維持継続する意味でも保ちたいが、より食の安全性を高めて「県外、海外」に高単価で新商品を販売していきたい。まずは自分たちの周りから消費を促せるような環境づくりをする必要がある。	
④地域資源	発酵などの食文化の継承が途切れてしまいそう。ヒトモノコトでいえば、モノは新潟に溢れている。活かせるヒトの発掘支援とコトの創出される環境づくりがマスト。ヒトという点では学生が多い割に、就職で県外に流出する傾向があるが、悪いことではない「戻ってきたい」と思わせる体験や理由が必要。	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	新潟市民を対象に、まずはゴミ拾いなどの環境活動、ご褒美の餅つき大会など。失われつつある地域の催しを、上手に現代風にアレンジし活用しながら、多様な食文化に触れる機会作り、価値を感じるための貴重な体験と啓蒙の場を作る。座学ではなく、体験の中から身近に豊かな資源が溢れていることを認識させ、未来のどこかのタイミングで気づいてくれるよう、「新潟には価値あるヒトモノコト」があるということ出来るだけ楽しく見せて伝える。	
⑥担い手（Who）	「株式会社バイオガール」「株式会社農業未来総研」「JAT」「MUSIC DROP」そして伴走支援に「NIIGATA MUSIC LABORATORY」。	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	地域住民(主婦・高齢者)が主体となり、この事業を支える。未利用魚はもちろん、１次産業(野菜・果物・米など)の規格外品、地域の高齢化により空き家から生まれる廃棄物(再利用可能)や、子育て層の使用済み品をアップサイクル。いらないものを引き取り、アップサイクルすることにより、原価を抑えた仕入れと整備しブランディングすることによる価値創造と経済的な取引が発生。ビジネスとしての共創機会がどんどんと循環している。地域内でまずはその効率と経済効果を高めたい。	今はスモールスタートの段階なので問題ないが、今後を見据えるならばリスク少なく、だがチャレンジはスケールして大きく行う必要が出てくる。身の丈に合ったビジネスを生み出すという前提を忘れずに、でも個人ではできないアプローチで将来の可能性をプレイヤー同士が顕在化し共有しているという状況は必要。
⑧事業で生じる成果	まず事業自体が存在していなかった場所に「アップサイクル」という視点が入ることで、地域住民や資源が繋がり、企業の困りごとを吸い上げ、新しいアイデアと共に見事に「事業化」を果たし始めている。拠点である新潟市西区の居酒屋の空き店舗を活用した「イノベーション・ラボ」は年始に餅つきを行い、子供や家族連れで賑わった。事業が生まれるだけでなく、地域の憩いや集いの場をも生み出した。餅つき大会などで行われる井戸端会議はまた新たな種を生み出していた。	

ローカルSDGｓ事業の詳細

活動団体主体事業

事業名称２：公共空間での地域循環共生圏アクション	
あらすじ	
NML代表の平田は新潟県スポーツ公園にて音楽イベントを長らく制作。その中で、景観含めて、空き空間の利活用を公園管理会社に提案していた。	
ストーリー	
県が管理するスポーツ公園では、多くのスポーツ大会や催しが行われており地域の様々な市民がみられる。しかし、パン屋は施設内にあるものの、憩いの空間としてはあまり機能しておらず、公園の魅力を活かし切れていないように感じていた。カフェや新潟の食文化に触れる機会づくりとともに、株式会社バイオガールの未利用魚や、農業未来総研の野菜、果物の規格外品利用で、新世代の食のコンテンツを紹介し、新潟の地域循環に対する理解を促進していきたいと考えていた。事業提案する中で、県としても管理会社としても地域との連携はPFIの観点からも重要課題だったようで、この点が強く合致した。カフェ事業の提案は、地域循環共生圏の事業をやってきたから成立した部分が非常に大きい。	

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	公園を中心として、地域の様々な市民が交流し、元気で健やかである状態。	売店スペースの借地契約が完了し、4/1からプレオープン。スタートから１年間のマーケティングを行う。冬場は公園に人が寄りつかないので、その点をどう乗り越えるかなど。
②課題	空間の利活用の活発化。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	カフェを通じたコミュニケーション、空間の憩いを高めることで、ウェルビーイングな状態をここに担保したい。	
④地域資源	潟、緑、花々、ペット、安心安全な公園空間。	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	カフェなので、コーヒー、レモンスカッシュ、クラフトビールなど。特にコーヒーは地元の焙煎士から、レモンも農業未来総研が取り組む予定の西区産レモンなどを材料として使用を視野に入れている。旬果甘味店ルコトのジャムやかき氷なども提携し提供。地域循環を食で伝えるエンターテイメントで身近に感じてもらう。	
⑥担い手（Who）	カフェスタッフと、ここに関わる生産者。敷地内のマルシェなどで協力頂くクリエイターなど。	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	食文化はもちろん、こうした場の賑わいと新たなカルチャーの出会い。それらが交差し織りなすミックスカルチャーと新たな気づきの連続。	閑散期にどれだけ、地域と連携し教育や地域貢献の目線で関わっていけるか。暖かくなってからまたカフェに足を運ぶ動機になるように、地元企業との連携を強めたい。
⑧事業で生じる成果	環境や地域に意識を置く人々が増えること、地域を維持するために必要なことを自らの体験などから感じ取れる環境。	

３カ年状態目標

■2026年度末の状態目標

2027(R9).3
金銭的にも体制的にもゆるやかに自立し、継続できるプラットフォームの状態。

■2025年度末の状態目標

2026(R8).3
企業や個人など、多様な主体による地域の循環を支える仲間作り
プラットフォームの自律分散化を目指した状態

■2024年度末の状態目標と振り返り

2025(R7).3
地域プラットフォームの運営／生まれた事業の実施。成果・効果の確認と事業整理

ふりかえり
プラットフォーム運営と事業支援については実施できたが、成果や効果の確認や事業整理がやりきれなかった。
成果と効果の確認については、今年度の見える化の取り組みの中で行う予定であり、事業整理についても、今年度は最終年度ということもあり、必要な部分に力を注力していく予定である。

中間支援主体のありたい姿

■中間支援主体としての獲得目標

活動団体が目指しているものの言語化を丁寧に行い、計画を共にたて、そこに向かうために不足しているリソースを客観的にとらえ、中間支援として補いつつ、人的リソースが不足する場合は外部人材を引き入れ活動を加速させていく。また、活動に人を巻き込んでいく為に必要な場づくりや見える化など、多様なかかわり方で活動団体を支援していく。
このように、多様な人材が中間支援主体の中にいるからこその活動全体を通した支援により、活動団体にノウハウを落としこみながらその周囲の人材に中間支援視点を持つ人を育み、中間支援主体がいなくても活動団体とその周囲の人材で活動が継続していく体制を構築していく。それらを通し、団体としては人材育成のノウハウ獲得を目指す。

■中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

中間支援主体としては、本事業終了後もepoとの良好な関係を継続しつつ、個々の活動において今回の学びを活かして地域において活動していく予定である。活動エリアとしては新潟市とその周辺エリアを想定している。様々なニーズが地域内にあり、既に活動をスタートしていたり、これから取り組む為の協力の求めが既に来ている。それらが、直接的・間接的に地域循環共生圏づくりに関係していくと考えている。
具体的には、地域内ネットワーク形成の場づくり、地域プラットフォーム構築、地域コミュニティ運営、などなど、そうした場面において今回の事業のノウハウを活かしていく。

中間支援主体の支援・取組計画

■中間支援主体の1年間の支援目標

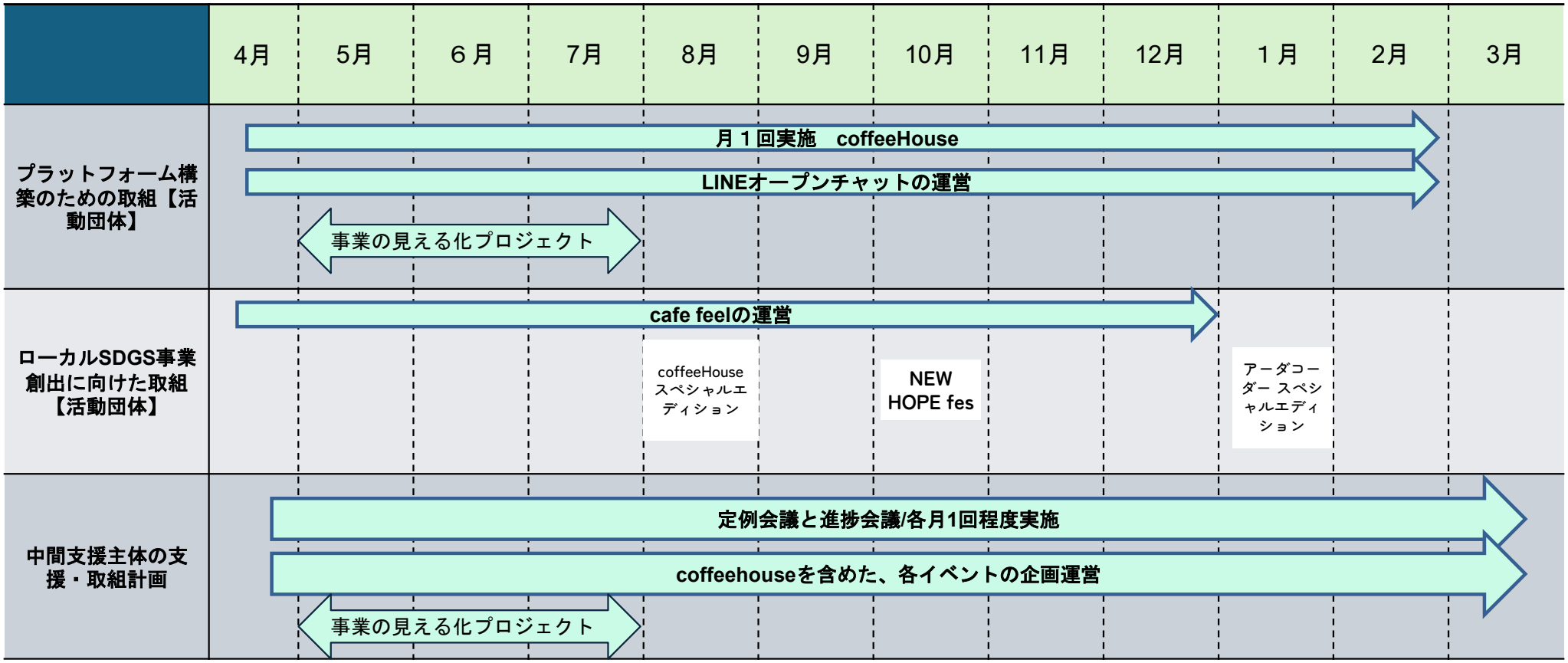
事業終了後もプラットフォームが維持され、循環が生まれ続けている為に、プラットフォームへのハードルの低い入り口を形成できており、地域について語れる場を持てていて、事業の種を支援しつつ、その事業が自分たちの活動にも結びついていくようなコーディネートやファシリテートができる状態を目指す。

■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題（見立て）	課題を解決するために必要と考える手段（打ち手）
①	この地域では担い手となる世代が受身的な思考を持つ場合が多く、県民性と言われる保守性が垣間見える。また世代間、行政と民間、など越境する場面でまだまだ在来的な価値観が強い。そこに対して活動団体NMLが得意な、自由でクリエイティブな発想を活かした活動が必要な要素として考えられる。 それらの異なる価値観が出会う場をデザインすること、また、別の価値観が混ざり合っても衝突や分断がおきづらい安心の場をつくることが課題となる。	既存の価値観とそこを打破していく価値観をゆるやかに混ぜ合わせていく場の設計、またゆるやかに混ぜ合わせていく為の安心の場のファシリテーションにおいて、共に場を創っていく。
②	プラットフォームへの参画やステークホルダーを更に巻き込んでいく為に、活動のわかりやすい見える化が必要である。 本事業のわかりづらさもあるが、活動団体の論理的な説明や言語化にも課題がある。	活動団体と共に、本活動の改めての全体の見直しや、言語化、見える化を外部のライターやクリエイター含めて行うことにより、自分たちの活動に対する理解が深まり、客観的な視点でとらえられ、言語化ができるようになる。
③	活動団体は、その場に合わせた柔軟な対応やエモーショナルなアクションは得意であるが、丁寧に計画的に進めることに課題がある。	マネジメント部分を以下の２つを中心に伴走する。 ■定期的な活動団体の進捗確認として、現状確認や、課題やリソースの共有などを行う。 ■長期的な視座での会議の設定を行い、プラットフォームの状態や継続性、役割やあり方等、長期的な視座でのふりかえりを行う。

活動・支援スケジュール

■スケジュール



備考（補足説明など必要な場合は記載）